

## 旧帝国図書館建築 100 周年記念セミナー

### 第 2 部「旧帝国図書館と上野の杜の文化的ストック-近代建築発展の中で-」

平成 18 年 9 月 30 日

講師：坂本 勝比古

ただいまご紹介にあずかりました坂本です。今日は、旧帝国図書館建築 100 周年記念セミナーということで、皆様方にお話申し上げる機会を得ましたことを大変光栄に存じております。今、米山勇先生の方から、近代建築のアウトラインのお話がありましたけれども、私は、この旧帝国図書館と上野の杜の文化的ストックということで、その中で、図書館が果たすその役割についてしばらくお時間をいただければと思います。

#### 1 上野の杜の歴史的文化的背景

皆さんの中には、上野については、改めて触れなくても熟知されている方が多いかと思いますが、とりあえずその現在の全体像についてちょっと触れさせていただきます。

上野というところは、元来、江戸時代から江戸城の鬼門にあたる地域でした。そういう意味では、江戸城を鎮護するという意味があって、その上から京都の比叡山になぞらえた東叡山寛永寺という名前がつけられたお寺があり、現在でも五重塔とか、東照宮とか、江戸時代の名残の歴史的な建物がたくさん残っています。上野は、上野を置いて東京を語ることはできないといっていいほど歴史的に由緒のあるところです。

(上野駅周辺の地図を見せて)JRの上野駅

から、東京文化会館、国立西洋美術館、国立科学博物館、このあたりが昔の寛永寺の根本中堂があったところです。ここは、東京国立博物館、東京国立博物館東洋館、表慶館、東京都美術館です。動物園はこちらにあります。もうひとつ、東京芸術大学(昔の東京美術学校と東京音楽学校)はここです。ここに黒田記念館、国際子ども図書館があります。上野は、地域の歴史と現在の環境を考えますと素晴らしい文化財の宝庫です。

私も時々東京に来るのですが、今日も上野駅で電車を降りますと、こういうチラシがありました。芸大と NHK が共同制作している「日曜美術館」の展覧会です。たくさんの方が参加しているようでした。私は、この上野というところは、日本の近代を考えていく上で、非常に重要な役割を担っていたのではないかと思います。

上野で内国勸業博覧会というものが明治 10 年から明治 24 年の間に 3 回開かれています。参加人員なども記しました。内国勸業博覧会は、最初は大久保利通が殖産興業を目的に、開催することを決定しました。明治 4~5 年頃に、大久保利通は、岩倉具視らと欧米を巡覧して、西洋の技術や文化を吸収して帰ってきました。日本では、これから明治維新を迎え、発展していくために果たさなければならない大

事なこととして産業の振興がありました。このため、この内国勸業博覧会というものが開かれて、多数の人が参加して、日本の近代の初頭を飾ります。それと同時に、イベント会場として、上野が注目されるのです。内国勸業博覧会は、第4回は京都、第5回は大阪と移りますが、東京では、明治40年に、東京勸業博覧会、大正3年には大正博覧会、大正11年には平和記念東京博覧会というような形で、イベントが開かれます。上野では、内国勸業博覧会は3回で終わりますが、その他の東京府が主催した博覧会は何回も開かれました。

上野の杜で、やはり注目されるのは、明治22年に東京美術学校、明治23年に東京音楽学校ができたことです。大変残念なことの一つは、この帝国図書館に対しては、国家100年の計を建てるにあたって、当時の図書館の関係者がどんなに努力されていても、その努力をなかなか当時の政府が報いてくれなかったということでした。

## 2 帝国図書館誕生への歩み

(上野の古い地図を見せて)これは、明治40年の東京の上野の杜のほぼ中心部分です。ここは、東京帝室博物館の場所で、JR上野駅がここに 있습니다。ここに、噴水のある公園があります。こちらは動物園です。ここに、東京美術学校があります。ここに、東京教育博物館ができます。帝国図書館の前身は、明治5年に建てられた書籍館しよじやくという建物が湯島聖堂大成殿(今のお茶の水の湯島聖堂)にできて、その後、明治13年に東京図書館と改称して、明治18年にこの東京教育博物館に合併します。

上野の計画の全体の中で見ますと、帝国図書館の建築は明治39年ですから、この地図の上ではできたばかりです。この位置は、どうし

てこのような位置になってしまったのだろうかと思わざるを得ないくらい、当時、ロケーションとしては大変厳しい状況にありました。ここに、東京教育博物館があるのですが、こちらの場所(国立博物館の位置)は、皇室がからんでいるので、当時としましては要求しても無理だろうと思いますけれども、少なくとも国を代表とする図書館としては、大変厳しい環境ではなかったかなと思います。現在、図書館というのは、地域図書館に行っても、どこも満員です。これほど図書館が市民の生活に行き届いているのは、私は非常にうれしいです。帝国図書館の歴史を職員の方から教えていただいたのですけれども、明治24年に、当時は、樋口一葉が根津の方に住んでいましたので、東京教育博物館に何日も通ってきていたそうです。そして、明治24年の8月8日に書かれた樋口一葉の日記の中に、

「いつ来たりてみるにも、男子、いと、多かれど、女子の閲覧する人、大方、一人もあらざるこそあやしけれ」

当時の文章ですから、ちょっと読みにくいのですが、

「それもそれ、多くの男子の中に交じりて、書名をかき、號をしらべなどしてもて行にたれば、違ひぬ、今一度書直しよと、いはるれば、おもて暑く成て、身もふるへつべし。まして、面みられさゝやかれなどせば、心も消ゆるき様に成りて、しとゞ汗におしひたされて、文取りしらぶる心もなく成ぬべし。今は代言試験も近付し頃成とかにて、法律書取しらぶる人いと多かりき」とあります。代言試験とは、弁護士の試験かもしれませぬ。帝国図書館の前身であります、東京図書館の時代の置かれていた様子を、今の若い人が思い起こされると非常に隔世の感

があるかと思えます。

話がそれましたが、そういうことがありまして、当時の東京図書館主幹の手島精一が、あまりにも図書館の置かれている立場が、行政的にも社会的にも地位が低いということを嘆かれまして、当時の文部大臣の森有礼<sup>ゆうれい</sup>に話をしまして、初めて図書館の研究のために留学する制度を設けます。欧米の図書館の現状をつぶさに視察して、日本でその成果をもたらさなければならないために、文部書記官だった田中稲城<sup>いなぎ</sup>を欧米に派遣します。また、先ほど建築の話で出てきました、辰野金吾も明治 12 年に工部大学を出てまもなくロンドンに留学したように、当時は、相当な人たちが海外に出ていきました。手島精一はとても偉い方でした。彼自身も、明治 3 年にアメリカのフィラデルフィアに留学しています。その時に岩倉具視<sup>いわた</sup>も、アメリカを巡回していて、通訳として参加しています。その後、明治 9 年のフィラデルフィア万博、明治 11 年のパリ万博、明治 17 年のロンドン万博、そして明治 22 年のパリ万博へと参加します。そういうような時代の中で、手島精一はそれだけの海外の万国博覧会を通して、海外の図書館の置かれている位置について非常に関心を持っていて、その表れがここに出てくるのです。

### 3 建設に携わった建築家、建築技術者たち

#### 3-1 帝国図書館建築に向けて

もう一つ、これは非常に運命的な事なのですけれども、明治 26 年にシカゴの万国博覧会が開かれます。これは後から詳しくお話しますけれども、この時に手島精一は各国の物産を展示するパビリオンの一つの日本館（鳳凰殿）を担当するため、親交のあった久留正道<sup>くわ</sup>という、帝国図書館の設計に

も携わった文部技師と一緒にシカゴ万博の設営に参加します。久留は後で、帝国図書館を設計する上で、重要な役割を果たすこととなります。

ようやく明治 30 年に帝国図書館の官制が交付されまして、真水英夫を始めとした、そうそうたる方が設計委員に選ばれまして、計画を立案していきます。

(久留の肖像写真を見せて)この人が久留正道です。この建物は旧東京教育博物館です。現在の国立科学博物館です。手島精一は旧東京教育博物館の館長をしていました。この建物が後に、東京美術学校として使われます。先ほどの東京美術学校の位置にあったのがこの建物です。(次の写真を見せて)帝国図書館の前身の建物には、ご覧のように、明治初期のペディメントがあったり、和風の寄棟があったり、こういう櫛形のペディメントがありました。(真水の肖像写真を見せて)この人が、真水英夫です。明治 31 年にアメリカに派遣されまして、アメリカのシカゴ、ワシントン、ボストンの図書館の実情を調べて帰って来ます。これがどういう建物だったかということは後ほどまたご紹介いたします。そして、帝国図書館の設計原案を出しますが、なかなか原案通りにいかない事もありました。明治 33 年に帝国図書館が着工するのですが、後の明治 35 年に真水は辞職します。その後は、いろいろな方が真水の後を継ぎますが、明治 39 年に帝国図書館は完成し、開館式が行なわれます。それから、昭和 3 年に第 2 期工事が着工し、昭和 4 年に増築工事が行なわれます。皆さんのおられるこの部分が、2 期工事の増築工事の部分にあたります。次の写真です。これは、真水さんの後を継いだ岡田時太郎です。辰野金吾と幼友だちだということで知られています。

### 3-2 久留が見たアメリカの建築

久留正道が見たシカゴのコロンビア万国博覧会がどういうものであったかをご紹介します。(万国博覧会の会場俯瞰図を見せて)ここは、ミシガン湖です。コロンビア万国博覧会は、ここに作られた非常に壮大な万博です。このあたりに、トランスポーターションビルディングという、列車で到着した人が入る駅舎があります。ここに、人工の池を作って、いろいろなパビリオンを建てます。ずっとこちらを見ていきますと、島がありまして、このあたりに日本館(鳳凰殿)ができます。この全体の建物がホワイトシティと言われるほど、白亜の殿堂のようなものがたくさん作られました。当時のアメリカは、建築についてはヨーロッパのルネサンス様式に強い関心を持っていたのです。

次の写真です。これは、平面図です。今のトランスポーターションビルディングがここにあたります。ここにアドミストレーションという管理棟ができるのですが、この周りに人工湖がありまして、ここに大きな機械館とか、農業館などいろいろできます。農業館に、マッキム・ミード&ホワイト(Mckim, Mead&White)という有名なアメリカの建築事務所が設計した建物があります。

(万国博覧会の会場写真を見せて)ここに島がありまして、鳳凰殿が建ちます。これを設計、監督したのが久留正道でした。これは鳳凰殿の全景です。この鳳凰殿は、京都の鳳凰堂に似せて作るのですが、そのものではないのです。鳳凰殿は、もちろん展示をしますから、同じスケールで作るというのは無理があります。このあたりの建物を見てください。これも皆、白亜の殿堂で、いわゆるグレコローマンスタイルというギリシャ、ローマの栄光の建築を、アメリカは当時一生懸命学んでいたのです。なぜかといいますと、当時のアメリカは、独立戦争が

終わって 19 世紀の末は、非常に資本主義が発達して、産業が興隆した、元気のいい時代だったのです。それを久留正道は目の当たりにしているのです。

(次の写真を見せて)これが、鳳凰殿です。ここに、バロック風のドームのある建物が写っています。この建物は、当時非常に評判が良いものでした。博覧会で使われた建物は仮設ものが多く、博覧会が終わると、普通は壊してしまうのですが、アメリカ政府は鳳凰殿を保存したいというので、日本政府は承諾して、これを保存することになったという逸話があります。これも逸話ですが、フランク・ロイド・ライトという有名な建築家が、当時シカゴで仕事をしていたのですが、この建物を見て、日本の建築に対して大変興味を持ったそうです。ライトは、日本建築の軒の深さ、それから、壁面いっぱい取る窓というものに大変興味を寄せました。日本でのライトの建築である帝国ホテルは、明治村に一部残っているだけですが、深い庇とか、大きな窓というデザインの根源は、この鳳凰殿を見たのがライトの日本建築に対する興味の始まりだといわれています。こういう建築構造の鳳凰殿を久留は設計し、手島も携わったのです。

(次の写真を見せて)これは、美術館として建てられたものです。これが、典型的なグレコローマンスタイルです。列柱を並べて、アーケードをつなげて、全体をまとめています。シカゴの万国博覧会では、イオニア式のキャピタルを持って、ペディメントを付けたこういう建物が、全部そのスタイルで統一されます。

(次の写真を見せて)これは、漁業館です。設計は、コブ(Henry I Cobb)という建築家です。この窓の取り方は、半円アーチをつなげるやり方で、ロマネスクスタイルといいます。全体がロ

マネスクスタイルです。こういう建物を当時、久留は見ています。

(次の写真を見せて)これは、マッキム・ミード&ホワイト建築事務所がデザインした農業館です。ドームがあって、ペディメントがあって、オーダーがあるというグレコローマンスタイルです。万博では、こういうものがたくさん建てられました。

### 3-3 真水英夫が調べたアメリカ著名図書館

(トーマス・ジェファーソン・ビルディングの写真を見せて)明治30年に、真水英夫がアメリカの図書館の研究のために派遣されます。トーマス・ジェファーソン・ビルディングという、アメリカの議会図書館です。私は直接見たことがないのですが、素晴らしい建物です。これ自身が博物館のようです。これも、ルネサンススタイルといわれていて、左右対称で、これではよくわかりません。オーダーはダブルコラムというやり方ですけれども、アーチがありまして、堂々たる建物です。トーマス・ジェファーソンは、アメリカの3代目の大統領になった人です。アメリカの独立宣言の草案を起草したといわれています。

(次の写真を見せて)これが米国議会図書館の全景です。アメリカ政府は、こういう堂々とした図書館を建てます。これは明治30年に建てられているので、真水は見ています。

(次の写真を見せて)これは、米国議会図書館のカットウェイダイヤグラムです。切っただけを見せています。四角い中の真ん中にこの大きなドームがあります。これは「メインリーディングルーム」と書いてありますから、閲覧室に使われているのではないかと思います。ロンドンの大英博物館も、この円形の中に閲覧室と図書が一体となっている構造です。

(次の写真を見せて)これは、米国議会図書館の平面図です。これは、1階です。口の字型で、真ん中にメインのホールがあります。こういうスタイルです。

(次の写真を見せる)これは、ファーストフロア、つまり2階です。メインリーディングルームになっています。こういうプランニングの建物を真水は学んで帰ってくるのです。

(次の写真を見せて)これは、シカゴのニューベリー図書館です。ちょうどシカゴの万博があった年に完成しているので、久留は、これを見ているのではないかと思います。ニューベリーとは、人の名前です。その人がお金を寄付して造った図書館なのです。個人がお金を寄付して、これだけのものを造っているのです。当時の日本は、国家でさえも帝国図書館を造るのに、お金をしづっているのです。そういう中で真水がこれを見るのです。

(次の写真を見せて)これは、国際子ども図書館の事務局の方へ、ニューベリー図書館の平面図が手に入らないかと照会しましたら、昨日、そちらから送ってきていただいたものです。このプランを見ますと、ちょっと帝国図書館のプランニングとは少し違うのです。帝国図書館のプランニングは、将来は口の字型になる予定でしたから、違います。こういう非常にシンプルなプランで建てられたようです。

(次の写真を見せて)これが、ボストン公共図書館です。これは、先ほど述べましたマッキム・ミード&ホワイトというアメリカの有名な建築事務所がグレコローマンスタイルで設計します。全体としては、イタリアのパラッツォのスタイルを取り入れます。このプランをご紹介します。

(次の写真を見せて)これは、ベイツ・ホール(Bates Hall)というボストン公共図書館の正面です。これは、ロング・ギャラリーといいまして、

もともとはイギリスのカントリーハウスという王侯貴族の邸宅の中で使われています。ここに、たくさんの絵画や彫刻などを飾りました。ベイツ・ホールも、ベイツという人がお金を寄付して造っています。このホールは、当初の計画通りに行けば、もっとホールが伸びていたのです。それが実現しなかったのですが、堂々とした図書館です。真水さんは帝国図書館の全体計画の中で、この図書館をイメージしていたんじゃないかなと思います。このプランをお見せします。

(次の写真を見せて)これは、ボストン公共図書館です。1895年に完成していますから、真水が行ったときには、できたばかりでした。ここがベイツ・ホールになっています。ここがロング・ギャラリーです。口の字型になっています。このプランは、帝国図書館の計画の中で取り入れられたのではと思われる。

(帝国図書館立面図を見せて)ここに、真水が最初に作った、帝国図書館の立体があります。これは正面です。真水さんはアメリカの図書館を見て、スケールの大きなものを造らなければならないということを感じ取ったのです。せっかくこういう案を作ったのですが、これが、あまり評判が良くなかったのです。どこが良くなかったかといいますと、装飾の評判が良くなかったのです。これは、和風の火燈窓のアレンジなのです。ここには、<sup>かえるまた</sup>蟬股がついているのです。ここに、<sup>ほうきょう</sup>宝篋印塔のような塔があります。この塔のかたちを、辰野金吾が気に入らなかったという噂があります。辰野金吾は久留正道の先生だったわけですから、いわば、当時の大ボスだったのです。私は、向こうの真似をしなくても、和風の要素を入れてもいいじゃないかと思います。この辺も和風の要素が入っています。

これは側面です。はっきりと<sup>かえるまた</sup>蟬股が見えます。こういう<sup>ほうきょう</sup>宝篋印塔のような装飾があります。この案はうまくいかなかったのですが、プランニングはこちらが正面で、こういう口の字型になっています。こちらが1階の書庫です。ここが正面で、こういう計画のものだったようです。これが、さっき申し上げたロング・ギャラリーにしようとした部分です。残念ながら、ここまでできなかった。これが全部できていたら、帝国図書館は素晴らしい図書館になったろうと思います。

こちらは書庫で、ここが、皆さんが今いらっしゃる旧閲覧室です。非常に高い天井で、堂々としたインテリアを持っています。しかし、せっかく大きな計画がありながら、当時はこれだけしか出来なかったのです。これは、日本の図書館行政が、明治の頃とにかく厳しい環境に置かれていたのかを物語っています。日清戦争後、日本は、非常に国威が高揚したけれども、文化的な事業についてはなかなか手が回らなかったと言われればそれまでなのですが、そういうことで、これは、当時の帝国図書館の歴史を語る上で、非常に貴重な資料ではないかと思います。

そのようなことがあって、真水英夫は帝国図書館の建設の途中で辞めてしまうのです。あれだけのアメリカの堂々とした図書館を実際に見に行くと、日本で実現させようとしたことが出来なかったわけですから、失意のうちに、辞任したのではないかと思います。

#### 4 上野の杜の近代建築

次に、上野の杜の建物の設計者をご紹介します。日本芸術院会館の設計者は吉田五十八です。国立西洋美術館の設計者はル・コルビュジエ、国立科学博物館は、最近改修工

事をしていましたが、高橋理一郎が設計しました。文部省の技師をしていた方で、久留正道と同じ立場のような仕事をしていました。東京府美術館の設計者は、岡田信一郎です。東京文化会館の設計者は前川国男です。東京国立博物館の設計者は渡辺仁です。東京国立博物館の特徴は、切妻の屋根と本瓦葺で、非常に和風要素を持っています。旧東京音楽学校奏楽堂ですが、これについて少し申し上げますと、これは、取り潰す予定だったので、予算まで計上されていました。ところが、前野まさるといふ建築史家が、「音楽学校の貴重な遺産なので、取り壊してはならん」と言って、残したのです。普通は、国が予算を計上したら、それを取り消すということは大変難しいのですが、前野先生は辞表を胸にして、奏楽堂を残すことに努力を払ったと言われています。そして、現在、国際子ども図書館の近くに残っています。明治23年の建物です。設計は、山口半六と久留正道の二人が携わりました。次は、東京都美術館です。これは誰かご存知でしょうか。設計者は前川国男です。旧東京図書館書籍庫です。今は、あまり知っている方はいらっしゃらないかと思いますが、今でも残っています。これは、小島憲之が設計しました。この建物は明治19年ですから、先ほどお話いたしました東京教育博物館の時代に建てられました。旧東京美術学校工芸部ですが、これは今の東京芸大の音楽学部の方にあった建物です。尖頭の二つ並んだ大変ロマンティックな建物でした。現在、残っていたら大変貴重な建物ですが、今はありません。設計者は古宇田實です。次の東京国立博物館東洋館の設計者は、谷口吉郎です。旧東京美術学校図案科第2部ですが、これも珍しい建物です。美術学校内にありました。装飾がバロック調で、オーダーがありまして、

煉瓦造の建物です。現在はありません。設計者は大沢三之助です。次の表慶館は、ご存知の方が多いかと思いますが、設計者は片山おとくま東熊です。宮内省の内匠寮の技師です。片山は赤坂離宮も設計しました。これも非常にルネサンスを基調としますが、バロック風の整った建物です。東京文化財研究所黒田記念館は、国際子ども図書館のすぐ隣です。日本の洋画界の重鎮の黒田清輝の素晴らしい裸体画を展示している記念館です。この建物もルネサンス調のファサードを持っています。設計者は岡田信一郎です。最後は初代東京帝室博物館ですが、明治15年に建てられました。第2回の内国勸業博覧会でも展示場で使われました。イスラム風のアーチを持った建物として有名でしたが、震災で壊れました。設計者は、ジョサイア・コンドルです。

## 5 上野の近代建築 その秘められたドラマティック・エピソード

「上野の近代建築 その秘められたドラマティック・エピソード」と、過激な表現をしてしまいましたけれども、先ほどご紹介いたしました東京帝室博物館は、競争設計(コンペティション)で建てられました。先ほど話にも出ました、渡辺仁が1等に当選します。この競争設計の条件として「日本趣味ヲ基調トスル東洋式トスルコト」で、渡辺は入選するのです。

(写真を見せて)ところが、この下の絵を見てください。こちらの案は、前川国男の作品です。全く東洋趣味ではなく、まさにモダンな建物です。前川国男は、昭和3年に東大の建築学科を卒業しまして、その卒業式の日、ヨーロッパに発って、ル・コルビュジエの下でフランスのモダニズムをしっかりと勉強して帰国します。昭和6年の帰国した年にこのコンペティション

に出会います。その条件に、日本趣味を基調とした東洋式とすることなんておかしいじゃないか、もっと自由に設計させろということで、あえて、落選することを承知で、設計案を出すのです。そして、「負ければ賊軍」と言って、自分は、モダニズムというのをもっとやらなければいけないのだと、アピールするのです。

(写真を見せて)これも、渡辺仁の案の一部です。和風の要素がたくさん見えます。

(次の写真を見せて)これは、皆さんも良くご存知かと思いますが、九段にある軍人会館です。このように、帝冠式といって、国粹的な動きがあり、屋根に和風の入母屋をあげています。

(次の写真を見せて)これは、京都の市立美術館です。これは、今も残っています。こういう中で、前川国男は西洋的な案を出すのです。

(次の写真を見せて)昭和12年に、パリで万国博覧会が開かれます。当時、日本館といいますが、先ほどのシカゴの万博の鳳凰殿で紹介したように、和風で作るのが絶対的な条件だったのですが、前川国男の出した案がこれでした。この案を出したときに、日本の博物館協会は、顔をしかめます。これが日本調だといえるかと言うのです。それで、前川の案は問題になりまして、和風の案を前田健二郎が作ります。ところがこの前田の和風案は、フランスの労働者には建てられないということで、廃案になってしまいました。

それで、やむなく出たのが、次の坂倉準三の案でした。坂倉も、前川と同じようにル・コルビュジエの下で勉強した方です。坂倉は、前川ほどではないのですが、開放した大きな開口部や、シンプルなデザインという日本の伝統的な様式を現代風にアレンジしました。坂倉は、鎌倉にある神奈川県立近代美術館を設計した方でもあります。これは、日本の博物館協会は

あまり気に入らなかったようです。そのようなことで、モダニズムというのは、現在は非常に盛んですが、昭和の初期は、それが受け入れられなかった、モダニズム受難の時代といってもいいのではないかと思います。

## 6 むすび

先ほどのお話に戻りますが、上野の杜の風土的、文化史的な特徴は、深くて広いという言葉がそのまま当てはまるのではないかと思います。かつて、この場所は、菱田春草や、下村観山、横山大観という、明治維新以降の日本画の美術をリードした人たちが歩いて美術学校に通っていた場所でした。岡倉天心という人は、フェノロサというアメリカの美術評論家の影響を受けまして、日本が近代化していく中で、日本画に対して非常に強い示唆を与えた人です。ただ、岡倉天心は、後に美術学校の校長になって、まもなく非常に改革的なことをやりますが、結局は失脚しまして、明治31年に日本美術院を創設します。日本美術院は、谷中にできるのですが、こういった日本美術についても大変な作品が生まれたところでもあります。

また、国立西洋美術館は、松方幸次郎という、明治初期から中期にかけて、総理大臣になられた松方正義の三男のコレクションが基になって造られました。松方は、海外に長く生活していて、フランスでたくさんの美術品を購入します。それが、戦争が始まったことで、日本に持ち帰れなくなりました。戦後になって、ようやくコレクションが返還されるのです。その松方コレクションを見ますと、ルノワール、モネ、マネ、セザンヌ、ゴーギャン、ロダンの彫刻など、そうそうたる作家の作品がたくさん集められて西洋美術館に展示されています。私は、そういうものを見ますと、上野の杜が持っている文化



的なストックは、単に公園としての名声ではなく、非常に深い芸術的な裏づけのある芸術文化の宝庫に当たるのではないかと思います。芸術文化といいますと、創造的なエネルギーが必要なわけですが、そういうことも風土的な特色として、再認識する必要があると思います。

それから、帝国図書館ですが、建物を残すにあたって、国立国会図書館の関係者の方々が相当な努力を払って実現にこぎつけたのではないかと思います。もちろん私たち研究者からすれば、建物の持つ価値というのは非常に深いものがあるわけですが、この建物を単に保存するのではなく、どのように活用するかということも含めまして、相当いろいろな検討がなされたのではないかと思います。

(国際子ども図書館の写真を見せて)これは全体の4分の1でしかなかったにしても、これだけの迫力のある建物を生み出したそのエネルギーというものを、私どもはこれから将来にどう繋げていくのかを考えると、国際子ども図書館という形で甦らせたことは、次の時代を担う子どもたちの教育とか情操とか国際性とかを考えていく上で大変に意義深い。それを可能にされた関係者の方々のご努力に敬意を表したいと思います。そして、そこには伝統と同時に新しい機能を織り込もうとした努力があって、初めて可能になったのです。それから、技術についていえば、この建物は、関東大震災から残ったのです。上野の大地というのは、壊れた建物もあったのですから、この建物が残ったというのは、それだけ技術的なストックがあったわけです。

(次の写真を見せて)これは、先ほどの米山先生のお話にもありました、レリーフ彫刻(メダリオン)とかエンブレムという言葉で使われてい

ますけれども、いわゆる紋章に類するものです。この建物の全体の構成の中で非常に印象的です。もう一つ、ここに入っているスパンドレルという上と下の階の間の壁面を構成しているものですが、これは、東京美術学校の鑄造科の先生と学生さんが作ったものだといわれています。帝国図書館を生み出すのにあたっては、美術学校の協力もあり、大変意義深いものがあります。

(次の写真を見せて)これは大閲覧室です。このオーダーなんかも規範の下で作られます。エディキュールとは、神殿の入口に設けられる装飾の一つです。これもやはりグレコローマンの影響を感じさせるものです。漆喰でできていて、修復するのに、大変な労力が要りました。

(次の写真を見せて)これは階段室です。この手摺りはアメリカから輸入したもので制作しています。

最後になりますけれども、この歴史的な建造物をどのように活用するかという中で、この建物は、日建設計さんの他に、安藤忠雄さんが参加されています。私は、彼がまだ無名な頃から良く知っています。安藤さんは、今はもう国際的な建築家として知られています。いろいろな試みをされていますが、いい点もそうでない点もあるかと思うのです。いずれにしても、歴史的な伝統的な建造物に対して、モダンなデザインを組み合わせたという点で意義深いものがあります。昭和初期に、様式建築に対して、一つのアンチテーゼとして、モダニズムが起こります。そういう中で、戦後のモダニズムの一つの例として、古い建物と新しいデザインというものをこれからの建物の再生の中で生かされていけることが期待されます。また、国際子ども図書館を免震構造にしたということは、非常に建物の生命を長引かせるという上でも、

大変意味があります。明治初期のことを考えますと、隔世の感があります。

私は、国会図書館に時々伺うのですが、本当に職員の方が親切です。レファレンスサービスも、懇切丁寧に対応してくれます。樋口一葉ではないですが、昔の図書館は、随分厳しかったようです。お金も取るし、監視が厳しくて、ちょっと声を出したら怒られたようです。今の国立国会図書館の置かれている立場や、役割ということを考えますと、この建物が未来に向かって輝かしいエネルギーを発揮していかれるように期待してやまない次第です。以上で私のお話を終わらせていただきます。